

Title	シャルル・ヴェルランダン フィリップ二世治下のフランドル：経済危機の機関
Sub Title	
Author	渡邊, 国広
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1953
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.46, No.7 (1953. 7) ,p.573(81)- 575(83)
JaLC DOI	10.14991/001.19530701-0081
Abstract	
Notes	論文紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19530701-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

する政府側の周頭な警戒に依つて完成された。資本家と労働者との厳密な分離は、結局において近代的階級對立の明白な先鞭を附けたのであつた。

成程イタリーの工業活動は、「第十五世紀における農業に對する資本と労働力との非常に顯著な轉換を考慮しても」、「この期間を通じ、又第十六世紀の大體を通じて最も印象的であつた」。然し近代資本主義の大きな推進力となつたのは、決してイタリーにおける經濟發展ではなかつた。寧ろ「資本主義は、その最初の原動力をイギリスの織物工業から獲得し、直接的には中世における主要な中心の末ではなかつた」といはれている。然らば何故か。近世イタリーにおける資本主義的發展を挫折させたのは一體何であつたらうか。

「一つの明瞭に重要な原因が、例えば、貴金屬の動きであつた」。「アフリカ金の輸入が減少しつゝあつた一四七〇年と、メキシコ銀の影響が氣附かれ始めた一五四〇年との間において、如何にイタリーが貴金屬の缺乏に苦しんでいたことか」。しかも「かくして惹起された資本の不足が多くの地域的要因に依つて激化された」。「ジェノアの商人は、例えば、東方貿易に基づく利益の減少と、それに依る業界の資金源の枯涸とを誘發した第十五世紀後半におけるトルコ人の抬頭に伴なう商業植民地の喪失に依つて特に、又一五二八年迄続いた國內投資に對する慢性的な政治不安の妨礙的抑壓に依つて影響された」。後に「ヨーロッパに流入した大量のアメリカ銀が通貨膨脹を持込み、そ

の結果イタリー労働者の賃銀がフランス、ドイツ及びイギリスの労働者の賃銀より遙かに急激に上昇した時」、「この事實も亦「イタリーの製造業者を決定的な不利において諸外國の競争者と對決させる」結果を導くに至つたのであつた。

「イタリーにおける通貨膨脹の慘害が激しさにおいてスペインにおける通貨膨脹に殆んど次ぐものであつたことは、第十六世紀における兩國間の密接な政治關係の結果であつた。従つて近世イタリーにおける資本主義的發展の挫折に關しては、「對スペイン關係が經濟活動の擴大を萎縮させた有力な原因であつた」といはざるを得ない。例えばジェノア人は、財務官や傭兵隊長として資本や組織能力の重要な部分をスペイン王室強化のために提供し、國內の工業生産の擴充については敢て顧慮しなかつた。「資本家的生産様式への轉化は」、「このように、「安易な利益と魅力ある社會上・政治上の機會のために斷念されたため、事實においてジェノアの工業は衰退した」程であつた。

「若しイタリーが中世末において局地的な高さより國家的な高さにおいて發展していたならば、フランスやスペインの侵入を防ぐことが出来たであらう」し、又「國家的基礎の上に立つた初期資本主義は持續と發展との一段と大きな力を持つたに違いない」。「社會的・政治的構造が従前の儘の時代に於いてすら恐ろしく有力な、強大な諸外國に依る支那は、必然的にイタリーを經濟上の先驅者から寄食者に變化させた」のであつた。然し衰退は、固よりこのような政治上の理由からだけではな

い。例えば「中世のリグリア貴族の執拗と適應性が、第十六世紀におけるグリマルデイ家のような門閥の多方面に亘る活動を特徴づけていた」という事實からも知ることが出来るように、當時のイタリーにおいて依然として根強かつた舊階級の存在も亦「中世末及び近世初頭のイタリーにおける十分に成熟した資本主義的發展を妨礙した」重大な他の原因であつた。「通貨膨脹の時期において成功したのは一般に土地階級であつた」と、

と、「イタリーのスペインに對する從屬は、土地階級にとつて國內における政治的優越を強化する上に役立つた經濟上・財政上の寄生的生活のための機會を提供した」ことから、例えばジェノアにおいては、「一三三九年に支配階級として打倒された土地貴族が、一五二八年のアンドレア・ドリアを中心とする政變を契機として顯著な回復を遂げ」、都市に定住して營利活動に従事し、富を獲得することに依つて政治權力を掌握して、遂に市民層を壓迫するに至つた程である。即ち近世のイタリーにおいて「封建貴族は、精力・氣概及び適應性を驚く程に保存し、變化した歴史環境のなかにあつて非常に大きな力を保持することが出来た」のであつた。しかも反動勢力のこのように根強い存續は、直接的には「一四五〇年から一六〇〇年迄の時期を特徴づける諸都市における政治危機」を深大化し、結局において經濟力の退歩を導かずには措かなかつたのである。

(渡邊國廣)

シャルル・ヴェルラン

「フィリップ二世治下のフランドル

——經濟危機の期間——」

Ch. Verlinden, "En Flandre sous Philippe II: Durée de la crise économique." Annales. Economies. Sociétés. Civilisations. Janvier-Mars 1952 No. 1, p. 21-30.

フィリップ二世治下のネーデルランドに關しては、詳細な研究がない。通例この時期は危機の時代と看做され、嘗てこれ以上の説明が試みられたといふことはなかつた。

政治の面についていへば、ネーデルランドは、フィリップ二世治下において相當な困難に見舞われていた。第一に、ネーデルランドは、フィリップ二世が劃一政治の必要から剝奪した自治權を回復しなければならぬ。又舊教主義に依る統一の達成のためには彈壓された新教に對する信仰の自由を斷乎として固守しなければならぬ。しかもこの種の強い欲求が、當時において早くも、フィリップ二世の支配を排除しようという激情に變つていた程であつた。不満は急速に深まり、一五六八年、遂にネーデルランドは立上つた。政治上、宗教上の反感は、ここに於いて一擧に表面化した。戦亂は北部より漸次南部に擴大して行つた。事態を憂慮したフィリップ二世は、總督アルバ公を派遣して叛軍の鎮壓に當らせ、一五七八年、辛うじて南部諸州の

懷柔に成功したが、當初より意外に固い結束を示した北部の諸州は、却つて共和國の樹立を宣言し、フィリップ二世の雄圖に對して根強い反抗を示した。戰國は半世紀という長期に亘つて續けられ、政治の安定は絶對に不可能なことに屬したのである。

然し政治上のこのような混亂状態が、その儘當時のネーデルランドにおける經濟の状態にほかならないといひ得るの。故ビレンヌ教授の指摘しているように、一時戰場化したフィリップ二世治下のネーデルランドにおいて、果して實際に經濟活動が長期に亘り、しかも全面的に停止してしまつていたのであるうか。

南ネーデルランドに關する限り、事實は寧ろ逆であつた。麻織物、毛織物の各工業について見ても、需要に應じ得る麻織物、毛織物の量が、依然として生産されてきた。従つて諸都市における麻織物、毛織物の各消費水準は、戦時にも拘はらず、相當に高く、特定の期間を除けば、豊かな消費生活が營まれ、政治上の混亂に引替へ、經濟状態は寧ろ安定して来たといつても差支えない程であつた。

例えば、都市オールドナードについては、麻織物に賦課された消費税からの収入を見れば、一五四一—四六年の六一八リール、一五五八—五九年の六八四リール、一五五九—六〇年の七六八リール、一五六七—六八年の八四四リール、一五六八—六九年の九四二リールに對し、一五七〇年には一、

一一〇リール、更に一五七九年には一舉に約二倍の一、九四三リールであり、豊かな消費生活の有様が窺はれる。然し一五八〇年以降において消費は急速に減少し、麻織物に賦課された消費税からの収入も亦激減した。そして以後十年間はこの状態から脱することが出来なかつたが、一五九〇年には消費生活も立直つた。即ち麻織物に賦課された消費税からの収入が、一五九〇年には三九八リール、又一五九一年以降一五九五年迄の各年度については、それぞれ五二二リール、四四四リール、三三三リール、五一八リール、五二四リールであり、消費は、麻織物に關する限り、急速な回復を示していた。

都市クルトルにおいて事情は全く同様であつた。即ち麻織物に賦課された消費税からの収入が、一五七五年には七四四リールであつた。そして麻織物から僅か四三〇リールの消費税に依る収入があつたに過ぎない一五八七—八八年を経て、一五九四年には六二二リール、更に一五九五年には七一〇リールとなり、以後順調な増収が続いてきた。しかも第十七世紀に入つて生産量の増加は意外に著しく、都市クルトルにおける豊かな麻織物消費を保證した。

都市ペーソンの場合は如何。ここにおいては、毛織物に賦課された消費税からの収入が、一五四一年には四七三リールであつたが、一五七二—七三年にはその約二倍の九三六リールであり、戦争の不安にも拘はらず、生産が依然として續行され、市民の需要に應じていたことが窺ひ知られるのである。

Revue Historique. Guillet-Septembre 1952

pp. 1-14

都市ホンドシュートについては、毛織物の生産量が、一五七六年には八四、一二二反、一五七七年には八四、一七二反、一五七八年には一一〇、〇〇〇反以上であり、生産は寧ろ擴大の傾向にあつた。又毛織物の輸出状況について見ても、一五二七—二八年の二八、六〇三反に對し、一五七二—七三年には八二、一一四反、一五七四年以降一五八二年迄の各年度においては、それぞれ九三、九七一反、九三、九九三反、九〇、七八九反、八九、六八六反、九六、二八一反、九六、二八一反、九六、二八一反、九七、七〇五反、八八、二〇九反であり、焼打を受けた一五八二年以前において、戦亂が生産を妨げたという證據は、何一つ見當らなかつた。

高等法院の起源は、大體第十三、四世紀のことに屬する。當初これは最高司法機關であつたが、遂に勅令に對する抗議權をも獲得した。更に一七一五年に至り、攝政オルレアン公が高等法院に對し大幅な特權を認めた。以後、高等法院は、本來の司法機關たるほかに、豫算・課税・法律の登録をも司つて立法に參畫することとなり、第十八世紀を通じて意外に活潑な活動をなし、國王との衝突も亦屢々であつた。しかも高等法院は、全フランスに根柢を有し、最も重要なパリのものほかに、全土を通じて十二を算え、それぞれ一定の管轄區域を有し、その職員はパリのみでも數百人あり、總職員は實に夥しい數に昇り、強力な特權階級を形成して一般の羨望の的となつてゐた程であつた。但し高等法院の貴族は、舊制度も末期となり、國王との衝突も屢々であつたこの時期においては、最早や新人に對して封鎖的な階級ではなくなつてゐる。

ジュアン・エグレ 『舊制度の末期におけるフランス 高等法院の貴族』

Jean Egret "L'aristocratie parlementaire française à la fin de l'Ancien Régime"

論文紹介

八三 (五七五)

然しフランス高等法院においては、依然として貴族が各部について牢固たる勢力を持ち續けてゐた。フランス高等法院の主たる構成者は未だに貴族であり、しかも主たる構成者であるこの貴族が、フランス高等法院においては、「感情的にも利害的にも……合致している一つの大きな家族」を形成していたのであつた。従つて、大半というものを商人の出身者のなから求めたパリ高等法院の場合と違つて、フランス高等法院は、依然とし